續子枕

續草枕集

遠中　　斗入

落馬して俳諧の反芻哉　　草人

翁の海ゆたかなる風を尋る　　岳輪

櫻咲この三日月は時鳥　　素驥

枚菜掛き仏か居かゝ仏　　乙堂

子の訓る彩の栄恒かゝ罷し　　嵐外

雨の降りの人淋しの事

ほそくと萩の明る帝の後　入
けしの窓ゆ八今文日あり　堂
引抜て藝術佛ふ物　蘭　蘖
いそくんは出る　相　入
うき事の袖も濡ける雨の中　外
ちらふは及ふ大年の無　蘖
小角豆巻る月か音の悪淋　堂
引板おそ鳴きあひとそ　外

何ゆもうも秋の気風の消てゆ　雲帯
小坊の連を　跡をかまり　如毛
多智の草鞋は花の婦宜　蘖
度の気風のうとく板しき　堂
苗代の気ふ八意きき池の色　吐丈
沼敲の高はたる　半時　入
寺納の京を尋る方あるは　堂
云ふる夜の俳を書て来る　蘖

夕風の花の姿を思ひ仕舞　堂
月は消えゝ行かふ枝ぶり　入
己が名を明るく人うち任せ　外
形ばかりおうき絵の通ひ　堂
背入て流るる情ふ深くゝ　蘖
影日ちつゝふうつるふとゝろ　外
野茅月秋を惜む色のち　柳荘
萩吹きそゝぶる市のむら　希言

ちゝ鄰ふ又鯛の嗜と色　左琴
笠ほうちちゝ尼の弦勝ち　喜年
祝の目ふ案ゝる袂を閉ますゝ　其静
志めりのちゝる去れば雪　年
夏売れ姿の張る花の領　仝
折集りてのそく粥　静

コシ
斗入五

草人（ミノ）一　吐丈一
岳輅（ヲハリ）一　柳莊一
素礫六　希言一
乙堂七　左琴（ユミ）一
嵐外（カイ）五　喜年三
雲帯一　其静二
如毛一

湖雲

湖の水よこしぬる田螺とも
日をとろとろとくらす　素礫
稲葉小夜更ぬまその月入て　雲
顔さしのもれ出る人の影　礫
雪の間にて入しき君の姿　雲
若葉の風のさらさる蓑の形　礫

庵時雨の細き明りに打まもれ　雲

春も立ぬ一むきの花　仝

薄の袖夜の神も坊うあき　麟

起て恨をゆたくとふ　仝

ふるあらし外や越きりの音　雲

吹氣のとゐる花の蛙　仝

上弦の月と添る絵のうち　麟

菓若も時すぎ暮もかし　仝

蛩なまく魂ふき秋のうち　雲

ひるも高てさうゆきを利る　仝

快箱の狂も林き花の跡　麟

屏吟ふ世治の狗る山吹　仝

夢苗ふる根の去を兼へたて　雲

昼ふ門を明て休む　日　正阿

里くにもれて代弾る雀　竹庵

まふ時を国を尋まうん　其齢

生涯のよろ孔雀を元出し　万侑
曉くるかゝ別を借る　鬼洞
次の間を跡ふ物うき汗便り　艸龍
何人もつゝぬ本を枕てたく　子厚
思さしたゝむ人の住て世を送り　阿上
日暮くるか垂歯わすれて　雲
まち侘る宵ハ月の初月秋　阿
馬をまゝせて二度別する　庵

いたゞきとこたり医ハ陳腐の致　齡
又も理屈の人まとあ和　侑
あゆふたの仏るもあき切簾　洞
手吸こなする花ハ元中　龍
疫病の草紙のゝふ仏ゝけ　厚
巣かゝる知ら者の出てり　上

ミチノク
湖雲　十一

素檗　九　鬼洞　二
正阿　二　艸龍　二
竹庵　二　子厚　二
其齢　二　阿上　二
万岱　二

田家　素檗

雲の雨鳥の足に泡のつく
垣色づくしきき大根の花　隆之
稲束を朝ゝ市の商ふて　檗
きのふも今も餅すき月　之
吹ゝ移る風のそよて月の秋　檗
牧地を行の名ふるひ　之

草の葉に苔這ひ頼母しう
出るほのぼのしかも根つくこ　壁
休むひとの枝にすまる夕涼　之
見へし頭ほの人のかぶそひ　仝
言かはぬ時も綿をとるあ　壁
幽うまれハ虫くるしき　仝
月花暗月花も今十日　之
今朝の秋色ほの出て蔭の蔭　仝

死うめる持病をとも忘れ切　壁
啖こうる牧小溶中啖する　仝
其まゝに苔の苔むすの森　之
きけとまほとゝぎす夏貝の音　仝
時くほ住うきの宿のうり松田年
蔭をかりて一樣ほ松乙
物無に高佛高嘸もかし　壁
義小なれもうれちかふ　竹齊

来ぬ人を恋ふるとて

乙年

待ち待つる望月の夕の上

齊麟

静かなる庵を恋ふるこゝ地

こゝろくにぬけて欲しきを

麟年

まゝ舞ふぬたをとりて涼を

乙齊

起きぬまゝ蚊帳入るを

麟

夕月秋暑けくの往来く

齊

扶世秋の初中ゝ

乙年

見まゝに霧の中に織女待

齊麟

彼と知れば秋もちかし

年乙

明るにたゝぬ立夫の袖を思ふ

齊麟

笠かゝりて夢刻々言

年乙

この節の花を南へ吹ちらし

齊麟

遠のゝかの湯南乗下秋

乙

隆之　九
田年　五
松乙（ムサシ）　五
竹齊（十二八）　四

所思　斗入

乞食して記す　志賀楊外

雪くと志まくハ志く暮の花　素蘗
春風の線の匂ひの吹消く　入
晩のさくらの日ちゆくらこ　蘗
夢のねくたちを月のん面　入
遠くさ聲く怒る鶏　蘗

入口ふ弱ゆふ楠を聲高く　入
過るの遠き木立体美のうち　蘖
立ちまさりて強き流の夕　入
まき〳〵咎の拙ふ苟　蘖
枝打戸ハ去るのうちに倒れ屋　入
腹のくるしき六枚中の秋　蘖
ありひ度の月ふあの海を踏り　入
小町ゝ墓のさびぬる場　蘖

汁の実ふ芳しき香を尺つけ出　入
朱ふ塗り橋ゝ一あ中ゝ　蘖
花ゝ多ふ細ふの板庇　入
子の形ちを思ふ山つゝ葉　蘖
氣の低ふ寒日も考す紅葉　仝
布子の色を先ん殺て見る　若人
新ゝ色姿も考ふ打ほうり　蘖
ふのおこりの子あき山茶花　人

夕くに時雨降る夕方暮　蘗人

泣ぬるに魚とりすする　人

綿生て郡和を生る冬　蘗

書もはしく　おろぬ顔　人

時雨雲に泪のかはらん　蘗

青麻くの葉も枯まれ　人

帷子の月のなかめ　蘗

いつも雲ふやいと赤さく　人

立紅ふ本槿の風のいきれ立　蘗

方の時雨の雲　人

世を紫出口上をいひをかし　蘗

野ちさ白くふ曙　人

屋の紀の自もをかく蓋　蘗

鶯とまふ小貝　咲あく　人

素牒　十八

若人　九

甲子吟行ふ日ひとりとて地奥ふ
かくたどるたまつるに山ふかく白雲
峰かさなり烟る谷ふ埋んで書れ
たるうたのるりふも深山つたふ
かき欠さつふ入ふとくくの
清らのとくくとまをちかた
山をくるつふ山つくく計庵
のさまは清れのまをとんふ

とくとくとふかふ雪き敷かり陽花
紬か清し芭蕉葉のさらさらと
信世すらそもとのむひらを思ひ
出るに身をすてるにこそたちぬ
されい立ちかくり行ひまる
かも清冥を花ゆ屋けれと和ら
まさにかの住の月清てんもいく
すみわたるあへ
世を狂ふ尚り橘の山路か　ヨハリ　士朗

我宿や物ふるい物の花　チノセン　石池
むくくと黒ふて物の花　ヒセン　其外
永年のちりのを陽物の赤　カイ　曽人
雪とりかも拾ひぬるそのを　ミヤハ　阜池
ちいさいるうをうる物の新る　京　其成
那物か来ていをする雀り那　大オカ　升六
屋ふい白くもふくくる物の花　エツ中　魚心
ちくかに蕭疎の物の花　チノセン　泉左
雪よ永年の戸か寒をかし　ヨハリ　桂五

雪のゝ中へ入る枯枝の郷　甫秋（カヒ）
雪ふかゝるも世を離るゝ　鷺岡
雪や今ふ茅葺の枯枝して　除艾
宮ゝ見ハ水ゝ流るゝを伝ふ　恒見
黄ゝの時ふ世ハ松の色　五雄（ヨハリ）
雪ゝ吟ハもあゝふ仲間　鬼洞
雪に枇杷の古枝見たり　素鼎（ムサシ）
うゝもすや一ゝ流るゝの中　三都良
ゝ月空や光も祇おゝ月のゝ　左琴（コシ）

や毛庵する腰ゝ生ゝ菜たゝ雪の郷　田年
七草のあゝ雨ゝ雪ゝ精田ゝ　宇柏（アキ）
ゝ菜ゝや何もたくゝあゝ人の郷　鰹守（カヒ）
茅ゝに花こゝ雪かゝけたゝ山風　五芳（コシ）
ゝ神や犬もゝ人おゝ雪の夢　三札
雪風の明ハて生ゝ夢四ゝ　壷伯
雪風やかゝゝ風ゝ油煙　雨節（ヨハリ）
山里ゝ雪ゝ信ゝ雪ゝ新嘗こき　枝直（トフサ）
雪ふゝゝ中ゝ桂の一ト仕事　有望（フンゴ）

鞠のつゝを出す毎る赤椿　コン　斗樂
ゐふ曲けて椿を落す春　京　雪雄
その四ハ椿の赤の落毎し　ムサシ　毛久之
数の為の芝束や白椿　大サカ　井眉
小柴を仮かこ秋海棠の雨　加陵
魚とり連うほいう去れる　ヨハリ　魚堂
春の戸を仏うさそ去れる　イセ　鶴鳴
寒ふ海そかるものはるの雨　ユト　道考
連翹の邸戸かしかゐ去のる　仙市

蕎麦の二交ゆかしかゐ稚ゐ　蕎九
きのかも海きるの仏去れる　若人
秋をこそよ去ゐの連七俊かゐハ　ヨハリ　方明
青ふ去ゐする椿の邸　ムサシ　半星
陽炎の世に明るや老大工　ヨリ　素郷
伊勢やもふほ去る蓮切　ムサシ　夫山
七夕も入る芦四の詩や堤汁　チクモン　吾未
七会仏すめに歯二月ゐ　阿上
月やしるゐも春ゐる海の上　京　宗樹

早蕨やいつ迄立てき見のあを　嵐底
雛のまち根分を待て菜の苗　ヨク　義車
と多くいくの夕と時　地　大カカ　友國
性るの面に浮ける山京る　ヒタ　儲史
そ川夢と落か入る地う外　ヱト　護物
大和路の仮かりて曉月　ヨク　買月
曉雨や雲に浮たる雲の跡　柯曉
二枚もあき桃林の月和尓　コシ　年眉
鴨ものさうかしやき雲の月　カヒ　岳臺

田の面の江五月雨か新る曉月、天郷
雲の秋の月ふ淋き苅田尓　柳荘
狗らの遠鈴一生寿の芽　ヨク　武堂
青海苔ばかりきハ芽の京尓、谷水
いつの月ふハ立の寒を見る　カヒ　吾七
雲の海へ分れ出て邪を、漫々
分のふけを由すり出る田螺尓　微席
田子の月の立ものすハ泊り　東水
曙やは雛のそむ東風り吹　アフミ　柏翠

苗代か天の香久山ふる日うれ　祥禾（ヒセン）
白魚のゆゆしくもちよ日口まて　旧人（ナヅ）
時雨ぬ清の玄仏とくへ　行岱
瓜先の動くはかりきくはか　木鶏
芳噪ちかきくまくしの声　青梁（ナツヘ）
横かるつて藁の這入る家　一之
蕪蒔て昼けて雲る章魚　孔阜（イセ）
帰る雁又ひふ消る本の間か　蘭儿（チクセン）
秋の海ちと丈に春の芽をほく　三生

猫の恋通ふ秋うちうて義仏く　樗堂（イヨ）
時雨やてうちうふ猫の喧嘩か　太年（カヒ）
猫の恋ちんちん恋たかりけり　素流
糸猫ちひちう森ちかまかりを　了國（フセン）
苣細や日和ふかまる草ふかる　三弥（コシ）
ふるふかるちう立かつ花菫　蝸國（ハリヘ）
草の戸の茶売やはちく古　半古
大空や梶の曙おー出　雄尾（下ッケ）
木瓜の花何ふくはもする　南雄（ムナシ）

あらぬさも咲ける石竹の花　文角
数人の影もつけよ桃の京　一桑
ひくひかつぬて出雲き滴うれ　方三
大松の勝手毒ふりほどきん　渕九
うんこそ変の書ふ情かも　雨塘
けるやけるそもも旅の宝　葦泊
けるかりめこそ地桃　東有
ゆくるやは豊一海の乗り姉のも　晋莪
るやけ雲たちくて流ふきす　玉屑
むら山ふ比良のつきて雲雲　眉山
ちよ保くと朧の時に月ふ　魚卵
る佐らふ二日おろ永て良之　羅凪
七草をとゆても乗之良之　郁賀
聖日ふもきのふ庵も老桃　長翠
窓望ん持て桃の月ふ　葵亭
和の花や月のそんハまもの　棋間
和の京をとすそる果て有海　九渕

雪の光はそくくうの上　鹿太（上ヲ）
祢宜の来て居てハ新米の茶　石鳴
小鳥の声に巣ゐ替わり葉ず　路川（エト）
雪うち解も時うりかはる　一草（兵コ）
花ぞ見る垣もほうきす牡丹　玉峨（チクセン）
赤の夜蓑ふ編ふかきつちる　耳谷（カヽ）
雪も時て居る樹やくんこる　艸司
宗古雪ちりつけの花は便りゐ　乙見（カヒ）
京かうり藪の廣ちよかんこる　蘘市（エト）

宗古雪時や六日の加茂堤　若翁（イカ）
よく時ハ一羽くたを行く子　麦茂（下ツケ）
あまくある里ともすりくよ　午人（ヲク）
月雪のあるひハ山雲扇　黄山（ヲハリ）
行くもおくて雲ぬる雲扇ず　文嘯
月雪いつもの宿をけの花　蕉雨
月傾き秋とこ秋ありくの雲　如毛
酔ちるの来て動く風ぬるの雲　太嶺
けく一ちと脊の延るて義ハこ　對竹（ヒコ）

屋敷の内の竹つ原　白夜（ユト）
苔の足にも落ちまはるらき　成美
ちりかと風も冷るあり　大峨（ヒセン）
竹のふしに紅ふり八重花　瓢風（チクセン）
幔幕や笋賣うかる　蹄（ユト）
裸身の場もあるし麦の秋　巴江
麦うりを見るまうるし麦の墓　嵐外（カヒ）
麦の秋ぬと見へ秋の雑木や　吐天
松ヶ丘の影ふかきうしろ　百非（シク）

山住のちめかるく竹植る　六瀦（京）
二枝ほど夢のうちて時鳥　仙凪（テハ）
多の子て小鳥のちちの巣　喜年（コシ）
子の眠る松ヶ丘の風の音　棋人（カヽ）
時雨蓮ちちの白ひ　松乙（ムサシ）
きくまて八重咲ほとき　冊頂（大サカ）
青竹ふちりまつて部屋　素薗
日暮まてうつ移て岩の巣　于當（アフミ）
居重ね老も称をとき初て　亜頑

こそくと取舟かほそく稼うか　巣兆（ユト）
枝柿を売てそれ八百文　函嘯（コレ）
枝柿を出て拾ふもハ百蔭　奇淵（大サカ）
巳五人の目を分くハる枝柿　糸葛
淵茅生やふとるハ全か枝柿子　篤老（アキ）
尋糸や生き魚の焼ぬ匂ひ　正阿
夏の雨をよとしふる蠶　魚洋
夏の雨や茅を倒す蠶　雀堂（カヒ）
山ちの淀をるかハ似す枝の夕　東原（ヨク）

子供らうまてつの田を植ふ　春人（大サカ）
孫石手ちうかほこうふ、　尺艾
筑の香のこほれてそれや伝信川　東雲（コシ）
雲の雨を植ふ苅　物舟外　呑鳥
茅の竜やとり出て百合の花二ツ　鷺白（上ツケ）
ぬ小て丁紙淵土ちうふ　京　空阿
夕白や雲のそらのいかるり　北尼（カツサ）
花ほふ山むしを惜ふ小六梁　濃水（オカミ）
切屋青一時ちう風もかし　虎杖

何ありとさゝ山せ彩を砂蜜（ヨハリ） 蓬杣
ふふ蕊ふ花の暑ちよ孫留 （アキ） 雙蛇
乖抜〳〵月を法色さし苔の花 月巣
螺の言の葉入や五月雨 （エト） 有圭
枯芦手頬白の晩る墓地 万俗
灯ともれも形まぬ蕎の凉 （京） 千崖
凉ちふ夕白いの花川あける 竹庵
凉ちと抱あけて富士山 （ヒツケ） 許友
すゝちのすせを抜〳〵蛍 呂利

磯の鑒泡吹ちゝあつちれ （コシ） 古周
暑〳〵て麻とつるもや赤曽の屋 （京） 宗有
滝入て帷ゆかも〳〵二階れ （京） 岱李
白ゐのゝ小てゝのの赤の料理ゆ （ミカハ） 秋峯
夕立のあこりと吹やを地の系 斗宵
暑ちたゝ夕やゝれて赤分れ （ヨハリ） 硯静
白蓮の一輝さまゝ稲の中、 桃蹊
高弗系打を鳴る日の白ひゝ （カハチ） 杜口
小ゝふんてぬける茅の稲ゆ （カヒ） 可都里

みちきして声ちかく聞ふ　艸龍

今年の行基の使のもとより到　一左
行人のもとより文をもたらす　天朗
赤幸を示す　花はちやとの秋　葉便
相の国やこゝ　烟りの秋の夕　天有
をしふる秋さ　なるの白しら　春唄
秋来ぬと　えへぬ牧の紅　京　大左
六月の白しや　雪の松　室行

六月やひとり庵の寒　椿堂
秋ちかしとおもふ秋の立ぬ　冥々
唐桑の衣をかや　星の青　方居
七夕にうゝ　はぎが　花叔
星の衣をおり　白ふ文　鞍風
星に青　ちる　士國
おしや星の　の秋　夜亭
雲の雷の　立　冬化
かるゝをわ　青　帰撲

人とゝせんとする室の月かな　梅香都

魂祭を流さて八瘡瘡かな　寒屋（ノト）

ふるさとの八月盆の秋の子　少汝（ヨハリ）

ちかのゆうれ秋ちかしの花　京芦丸

朝顔の事すると秋ちかし　真貫（カヒ）

朝顔か年よる紅くく多　千阿（ミノ）

幕ちかもぬぐさ咲ふり　希言

あちこちやかりくいろ花の咲ゑし　雲帯

桔梗やかさすき生り者の秋　物成（カヒ）

如意寺扇の風ふきまゝ　寸雨（コシ）

ちゝ虫やかかけ行ちのみ　何尺（コシ）

すゝ虫の羽まてあるふつゝひ　芳之（アフミ）

草虫のあちこれ四ひき秋虫かな　乙丸（ヒタ）

うゝ虫の中ふ入なる三日の月　大阜（ヨハリ）

四日月くちをたゝふさ所ゆうれ　素明

葛の葉のうゝもすゝ所秋かな　呉未（兵コ）

蕎麦畑やもいさゝふ青の雲　春臺（大カカ）

待くし伝屋の弱や秋いさみ　如陸（ヨク）

花菜苦桃 いとあらうそ 恒九
稲の香とりまさるなるさはり 竹里
木啄の如ハ初んあく見えなる 泰雄
立りふかゝ森や芒の一ト枝 綾房
なまあらい嵐かもるや音の秀 一作
白露の時や言の人事まて 巣居
別れても有るものなれ秀の玉 秀山
雲の戸ふ折るもあり雨の山 雨蘭
露をおくおのひとつを悔の売 棟價

起るかゝ時なれ君のとゝあり 何彦
時のなかゝふかゝふ小ふ 十寸影
ほつてとと戸もあく時の秋ふ 乙堂
なれ乃や蓮とのつくもこゝ日 其齢
蓮和しと戸と萩の板もうふ 蘭叟
あ言ふ庵ても庵也小田の有 烏頂
戸峠や吹とこふ戸 庇 まさ役
波れて乃ゝあれまてのあしふ 田都留
行秀ふうとこふ沾うれ 有斐

茶多く持て柳きぬぶ　平角
松こして芝とさして張り船　岫九
撓ハ弓ものの色　京　月居
すい新木京京　涼堂
秋風や外ハ山色　葛井
稲妻や芦也　推巳
夕ぐれや蟬　子厚
柳ちや蟬の休む行の中　草九
ちらぬも木槿の花の雪ぶり　真蓑

秋もとあるとり初る木槿小　魯駅
麦の形のあられて若の柳し　槌村
山里の中ぐらしハ涼あるれ　朱紀
次を梯と風葉ぶり秋の山　希杖
来ぬまても彩ふ人のまれ　草人
四五日の栖と為りぬ今年米　潮雲
たとつく秋や伝法の根ぶり　快哉
秋る日の浮せ　栖　千汪
海附山の芝梯ぶ　馬城

ふるたるぬ海世をおか英菊ル　春哉（大サカ）

一年をかうきのく菓ル花　可盈（アフミ）

菊の香やもゝるものとりル白へ　史方（ヨク）

白きくやりふるる鞋のきき追　巴園（カイ）

せいちや生のうけかもりるの菊、　蘭亭

振袖の出るや秋之の竹の杖　青以

鞋つけハ馬もあ吟ふ秋之ル　茂良（京）

鞋之や鳥の渡る川乃上　一會（ヨク）

草鞋のあと訪ふ亦菊の時ル　竹齊（大サカ）

雪うゝや鶴ふ時るの降かうル　厚九（ハリヽ）

初しるル松の鞋をかゝ迎ふ　何穎

馬ふるや大ゆゝ時るふ蕎ル　格兆（クルメ）

うけぬけてうゝても沢蘭の時ル　麦太（大カカ）

赤ちの蕎も苦むす三ふル　兆如（ヨハリ）

をゝへらル て高ゝ ふる 大病ル　南江（イセ）

山茶花のぬくみを持て日ゝ寒　路宅（アキ）

山茶花の新もちあもゝ百ル　元々（ヒタ）

蜂の巣の吹きて出り枯柳　不外
赤い葉ちらつくよみの菊　蓬宇（カハチ）
雪の末初てうくぬ枯ゆ　憐霞（ナカト）
鶏けや雪来てうえれ八橋の宿　菊也（ヒセン）
暦大やとりの大事する海の音　太筑（カワヤ）
旅人の酒造ふ月の入日ル　山川（コシ）
冬の日をうてあれ柱の柳ゆき　棋朴
逢坂をきのふ鈴ふ小春うれ　夜来（大ナカ）
うちくと相の実集す小春ル　浦人（ヨク）
ちらくと魚うんくき小春ル　物白
旅人のさらゆき寄き小春ル　雉啄（ナカミ）
枯けや宴を枯ゆ枯ゆ枯ル　琴州（サワヘ）
末年もまく生てあよ綱代す　可考
つうとる尾ゆのちりの十和ル　山東（カイ）
寄う枯茶筌ふ冬の日影ル　左諧
鶏う来て嗜ふ枯のある家ル　蒼虬（京）
さかふしゆ夕暮時の中やすみ　得芝（ヨハリ）
風や泡雪の枯ゆ書くくも　文郷（ヨリ）

古かしや京と家の間の明　カ、鹿古
風やふくき屋の升高し　ムサシ國村
青くふかもちつさぬちとり　千丈
寺阿や目あもかるる時の雷　ハリヘ布舟
淀きるやさの大江も野ちの　オオカ釣翁
在明や波の法華の寺のあも　ヨハリ鹿野
野ふ行くを阿弥こめを　アキ玄蛙
あとけあきをとふ秋の　ムツケ菓也
ふ月の坊しし魚と紅の月　ヨク雄渕
雲の多い野あり雲のあも　イセ丘高
藤ふをるふふて時ちより　テハ三夕
大乳る松るやかる時澎　雄途
雲の日を薬消しふ雲ふ　泉何
時つも居て枯地弱勢　ヒヨコ桐栖
松ふ松をあまして俗金ふ　オオカ三津人
菊の背ふもはらき恒招ふ　ヨク蘭吹
雲ふふふんまりぬ乗の就、有是
松を法めて藤る弟くの月、投雲

納涼とてくやゆ佛も動くこの夕 北溟
言葉の半ばかくれもなく聞こゆ 岐東
蔦枯て旅の夢するあしたかな 楓江
枯葉踏みてふ老足枯尾花 芸門
枯尾花何かかくれひたき 菖三
袖疲れ夕陽よりの枯尾花 芦陽
ほつりんとうつろふ軒の屋根 滄波
さみだれの夕の雨の森沼すゑ 隆之
秋かついて三ひ生かれ君の事 八朶

椎柴のよもせを入する秋の雨 栄彦
淋しかふ立ける松もよりの雨 岳輪
あるゝ峰雲を待まて老かれ 風叟
霰やむあと色つぶしき沙ゝ 松夷
折くやの兎か曲る膝かしら 小泉
雑炊は平汐ゝ来れ鶏かな 暑隠
鬢髪やハ重ねてしこのすり衣 見二
あまきかて老ゝ入ぬ夕暮 亀白
老のなのとうぬ枝 ゆきさかか 日人

梅の香かもしたゝる入（ミニカカ）逆之
むしろ帆のかすかに来る海　乙（サク）二
念仏あけすの門ふゆるたり　素（京）頑
夕雲の雲ふるすかたちか　其（コン）静
乾徒も梯て地獄の裸うれ　蜂（大カカ）友
かゝ鉢か味のあるてをむ乾　佳（ヨハリ）雄
山里を遠く日の出る樒　武（タケハ）陵
藤て起てる倍のあるや物の花　真（カイ）恒
蓮華の先ひらかしてあり物　天（ヨハリ）尤

すゝきや俵の布ふ流ふ　竹（ヨハリ）有
尾〳〵の岩嶺ふ　是三
杉梅おるの名峰てとゝ　百（大カカ）堂
大根ふ〳〵戻りぬ夜ふ　長齊
湖の水ふて年を立ふ　大（ヨハリ）蘇
京門の杉も世ふ出ふ　芦（ルタ）月
山川ふ流ふ　荷（ヒタ）逸
ふ姫をとりて立し年の舟　東（ナカミ）洞
ふて年の中ふ山　詠（上ヲ）帰

小雪吕のさめて物憂しと年のくる　常南（コアト）

ゆくすかく叔父ふるまる年　蘿堂

行年や小松屋も庵のうち　雨暁

節季ごとの出口を出て戸口ぶ　啓山（ヒラキ）

かけ〳〵と茅つむ年の中ふへぶ　騏六（ヨハリ）

行〳〵て果〳〵ぶ年の暮　菩雪

文化の七とせ師走の十日比春湖

京京の庵すゝ孫ふ小とあつむ

蕉門書林　皇都寺町通二條　橘屋治兵衛梓